

2025 年 5 月 11 日 家族の日礼拝(復活節第4主日礼拝)メッセージ

「神の恵みは思いのままに」

牛田匡牧師

聖書 コリントの信徒への手紙 I 12 章 3-13 節

今回の聖書は、パウロがコリントの教会の人々に書き送った手紙の一部でした。コリント(コリントス)というのは、ギリシアにある町で、古代ギリシア以来、アテネ(アテナイ)やスパルタと並ぶ主要な都市国家の一つでした。地理的には、本土と半島とをつなぐいわゆる地峡にある町で、現在では運河が造られているそうです。コリントは、そのような狭まった場所でしたので、古代から、交通や商業、また軍事の要所として栄えていた都市でした。そこには民族も文化も多様な人々が多く集まっていたので、コリントにあった最初期の教会、キリスト教共同体の中にも様々な問題があったようです。そして、そのようなコリントの教会の人々から「こんな問題があって、困っています」というような手紙が、パウロの所にはしばしば届けられ、それに対してパウロもまた返事を書き送るということをしていました。この「コリントの信徒への手紙 I」の 11 章から 14 章にかけては、「教会とはどういうものか」「どのようにして共に集会を持てばよいのか」というようなことが記されています。

例えば、3 節にある「神の霊によって語る人は、誰も『イエスは呪われよ』とは言わず、また、聖霊によらなければ、誰も『イエスは主である』と言うことはできません」という言葉も、何気なく読み飛ばしてしまいそうですが、要するに「色々な人がいた」ということの裏返しの表現なのだと思います。私たちの身の回りでも、例えば「あの人は何であんな酷いことをするのだろう。クリスチャンだと言っているけど、本当にクリスチャンならあんなこと出来ないはずだ」と感じたり、そのような言葉を耳にしたりすることもあるかもしれません。またこの「クリスチャン」という言葉を、「牧師」とか「お坊さん」とか、「人の親」とかに替えても、分かりやすいかもしれません。そのように「とても同じ信仰を持っているとは思えない」ような相手であっても「イエスがキリスト」、つまり「イエスは主である」と言うことが出来ているということは、即ち自分たちと同じ聖霊が働いていることの証しであって、「紛れもなく仲間の一人なんですよ」ということを、再確認させている言葉だと理解することが出来ます。

4 節以降は、一人一人の人に与えられている恵みや務めには、様々なものがあり、時に異なるもの異なることも多いけれども、それら「全てのことは、同じ一つの

霊の働きによって、霊が望むままに、それを一人一人に分け与えているのだ」(11)ということが記されています。そして12節からは「体は一つでも多くの部分からなっています」という有名な言葉が続いていきます。今回は読みませんでしたが、

「¹⁵ 足が、『私は手ではないから、体の一部ではない』と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。¹⁶ 耳が、『私は目ではないから、体の一部ではない』と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。¹⁷ もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこで嗅ぎますか」

「¹⁹ すべてが一つの部分であつたら、体はどこにあるのでしょうか。²⁰ しかし実際は、多くの部分があつても、体は一つなのです。(だから)²¹ 目が手に向かって『お前は要らない』とは言えず、また、頭が足に向かって『お前たちは要らない』とも言えません」

という言葉が続いていきます。

このように言われると、「なるほどその通り。パウロは良いことを言うなあ」と納得される方も多いのではないかと思います。そして、これらの言葉の通り、「教会という一つの体、職場という一つの体、家族という一つの体であっても、たくさんの部分から出来ているのだから、色々な人がいてもお互いに尊重し合って、補い合っていけばいい」と心底思うことが出来て、実行できている人は、本当に素晴らしいと思います。ですが、頭で理解するのと、心から共感して実際に実行できるかどうかは、別の問題なのではないでしょうか。

一人一人が別の人間であることなんて、言われなくても分かっている。分かっているけれども、「どうしてこれが出来ないのか」。どうしても相手の「その部分を受け入れられない、許せない」ということも、確かにあるのではないかと思います。そしてそのような思いは、とりわけ血のつながった家族において、よく見られるのではないのでしょうか。仕事の上で、それこそ取引相手や、お客さんを相手としている時には、多少のことがあっても気にならないにもかかわらず、家族の中で同じような態度をとられると許せない、「こっちの気持ちも考えてみてほしい」と思ってしまう。そのようなことが、誰にでもよくあるのではないのでしょうか。

相手の存在が、自分にとって近い関係であればあるほど、相手のことを客観視することが難しい。自分とは異なる存在として、距離をとって考えることが難しい。互いに依存し合ってしまうからこそ、自分の思い通りに行かない時には、裏切られ

たと感じてしまう……。それもまた事実なのではないかと思います。

今日は巷では「母の日」と呼ばれる日ですから、私たちの教会では「家族の日」と呼んでいますが、親子、家族がよい関係で、心からの愛情や、感謝の気持ちが生じているのであれば、それは本当にすばらしいことであり、そのような家族を与えて下さった神様に感謝です。けれども、一方では親子、家族だからこそその対立や確執があるのも事実ですから、「素直に感謝したり、喜んだり出来ない自分は、親不孝者だ。親失格だ」などと感じて、自分のことを責めてしまう人もいます。ですが、一つの体に連なるそれぞれの部分として、それぞれの部分が同じ働きをしなくても、同じ働きができなくても、互いに補え合えばよいのではないか、パウロはそうに伝えています。

どなたの言葉だったかは覚えていませんが、「本当の自立とは、誰にも頼らないこと、何にも依存しなくなることでなくて、むしろ自分が安心して依存できる依存先を増やすことだ」という言葉を聞いたことがあります。人間は一人だけでは生きていけませんから、誰にも依存しないことが自立だと言ったら、嘘になります。また家族だから、親子だからといって、一人の相手にだけ依存したら、お互いに首が回らなくなってしまいます。むしろ、友人関係でも仕事の関係でも、また社会福祉の制度でも、利用したり依存したりできるものを増やしていくことで、それぞれへの依存が広く薄くなっていく。それによってお互いに過ごしやすくなっていくということが、実際に有り得るのではないかと考えています。

Ⅱ節には、「霊の働き」について、「同じ一つの霊が、その望むままに、(それらの多様な恵み、務め、働きを) 一人一人に分け与えてくださる」と記されています。そしてまたそのように「一人一人に霊の働きが現れるのは、全体の益となるためです」(7)とも言われています。別の言葉で言い換えれば「ローマの信徒への手紙」の 8 章 28 節にある「万事が共に働いて益となる」ということでしょう。聖霊の働き、神様の働きによって、全てのことが益となるように、私たちはそれぞれが異なる賜物や人格を与えられ、それぞれの道へと導かれています。

また「ヨハネによる福音書」3 章 8 節には「風は思いのままに吹く」という言葉もあります。現代科学では、風というものは、気圧の高い方から低い方へと空気が流れて移動するのに伴って生じると説明されますが、古代の人々にとって、風は人間の思惑を超えて自由自在に、思いのままに吹いているものだとして理解されていたの

でしょう。そして神の霊、神の恵みの業もまた、そのような風に例えられているように、人間一人一人の小さな思いを超えて、全てが益となるように、神様の思いのままに一人一人に与えられていると理解することが出来るのではないのでしょうか。

そもそも、生まれるのも不思議、家族になるのも不思議、出会いが与えられるのも不思議としか言えません。一つ一つのことは、私たちの思い悩んだ末の決断や、選択の末の出来事と言うよりもむしろ、人知を超えて、自由自在、思いのままに、最善を目指して働かれる神様の恵みの業です。ですから、私たちも決めつけることなく、また期待し過ぎることなく、自由でありたいと思います。そして、そのようであってこそ、私たちは隣人を大切にすることが出来る、家族に対してももう少し優しくなれるのではないかと思います。

風のように思いのままに吹いてくる神様の恵みを、体いっぱいを受け止めて、私たちは今日もここから歩み出してまいります。